

特集

五十年史編纂を終えて

『名古屋大学五十年史』の編集を終えて

名古屋大学史編集委員長兼編集室長 篠田 弘

名古屋大学では、既に部局史、写真集、通史を刊行し、ここに十年余を要した名古屋大学史刊行事業を終えようとしている。また、この事業の中で収集された史・資料の保存・整理・活用のための名古屋大学史資料室の設置も認められ、この資料室をいかなる形態で設備し、発展させるかが、当面の課題である。しかしわが国においては、参考とすべき所謂大学文書館(Univ. Archives)は殆ど存在しない状況であるといえよう。

そのため、この分野の先進国である欧米諸国における大学文書館を实地検査し、その形態と機能および学术交流における役割を明確にすることによって、名古屋大学史資料室の在り方を考えるための基礎資料を得ることが当面の課題であった。

上記の文章は、今年の一月九日に帰国して提出した在外研究報告書「欧米における大学図書館(Univ. Archives)の实地検査」の冒頭の部分である。これを書きながら、大学史も遂にここまで来ることが出来たかと、感無量のものがあった。

私は、昭和五十一年に大学に赴任したが、まもなく「名古屋大学歴史編さん委員会」に出席するようになった。ここでは、創立四十周年記念の冊子を刊行することを中心に関議が行われていたが、いっこうに前進しない印象をもった。昭和五九年、「名古屋大学創立五十周年記念事業検討委員会」が設置され、その委員として出席したが、そこでは記念事業の第一に「名古屋大学史の編纂および刊行」が取り上げられたのであった。その後、昭和六〇年に名古屋大学史編集委員会が置かれ、専任室員をもった大学史編集室が設置されて、今日の基礎が築かれたといえる。

平成元年、加藤延夫編集委員長のもとで編集室長となり、まず、写真集の編集に邁進することとなった。編集室の専任助手が増員されて、勝山助手に加え、片岡、吉川助手の三名体制になったことは、当面、写真集の編集を主体とするも、他方では、通史のための資料探訪・整理を継続せねばならない状況のもとで、極めてラッキーであった。全学の欠員流用の総数がかなり厳しく押さえられていた当時のことを思うと一層その感が深い。写真は、寄贈、借用、購入等を合わせて六五〇〇余葉を集めた。その後、何度にもわたる五人会議（井上元助手を含む）、写真集原案調整会議を経て、平成三年夏、掲載写真の最後の調整に入った。助手諸君は担当部分について、各ページ毎に二倍の枚数の写真にまで絞りこんではいたが、その後どれを採用するか、どれを割愛するかが、なかなか決定できなかった。自分の選んだ写真に対して不採用の判断を下しがたい彼らの気持ちは理解できたが、掲載できる写真数の制限もあり、私はなるべく彼らの顔を見ないようにして蛮勇を奮って選択し、約六五〇葉にまで減じた。選択会議は、本部の第三会議室で、勤務時間後の五時頃から深夜にかけて行ったが、約一週間ほどかかったと思う。今と

なれば、実に充実した時間であった。

次に、印刷の問題である。グラフィア印刷であれば、出来上がりは、かなり良くなると言われたが、価格が高くなってしまう。そのため、活版印刷でも写真が上手く印刷できるところを探してもらった。助手諸君と共に、新潟の博進堂まで出向き印刷に立ち会った。元の写真にあまり良くないものもあったが、まあまあのものであったと思う。

平成三年末、写真集の刊行後ただちに「通史」編集のための体制を整え、それに全力を注いだ。通史の編集については、部局史の場合と異なり大きな問題があった。それは、視点・文体等の統一の問題である。このことは、それらが必ずしも同一平面上になければならない訳ではないが、通史においては、叙述が同一方向性をもっていることは要請されるであろう。しかし、このことと各章・節の執筆担当者の主張とを調整することは、不可能に近い問題であると考えられた。そこで、まず、執筆担当者の原稿を署名入りでそのまま掲載する『稿本 名古屋大学五十年史』を作成し、これを第一次原稿として、編集室で「通史」を執筆するという方策を講じた。

幸いこれが認められた。しかし、である。期限が来てもなかなか原稿が出揃わない。通史刊行は、創立五五周年である平成六年末までとされていた。止むを得ず、稿本は各章別に分冊として、揃ったところから印刷に回した。そして編集室では第一次原稿を元にして通史第二次原稿の執筆を始めた。しかし名古屋大学五十年史は、本来帝国大学になってからの五〇年を中心に叙述すべきであり、その観点から、稿本の目次の修正や叙述形態の在り方の変更が必要になった。また第一次原稿であるはずの稿本の章・節の中には執筆者の関心や主張から、第一次原稿となりにえないものも見られた。一時は非常に焦燥感に駆られた。結果として、予定されていた平成6年末の刊行に間に合わせる事が出来ず、総長をはじめ本部事務、名大出版会等関係者の方々には非常に迷惑をかけてしまった。深く反省している。

現在、出来上がった二巻本の通史を前にして、「とにかく出来た」と改めて思う。平成七年は、編集室の助手諸君には正月はなかった。元旦から編集室にきて資料を見たり、原稿を書いたりしていた。通史の一〇セットが出来上がった一月初旬、皆で覚王山で夕食を取りながら、遅れた正月を迎えた。

次は、名古屋大学史資料室をどのように設置、構成すべきであろうかと考える。資料室はヨーロッパ型よりむしろアメリカ型で、所蔵資料の保存・研究のみでなく、その公開にも重きを置いたものとすべきではなからうか。

(教育学部教授)

『名古屋大学五十年史』編纂発足の頃

元編集委員長兼編集室長 江藤 恭 二

早いものである。月日はめぐって十年余の時間が流れ去った。昭和六十(一九八五)年二月に第一回の編集委員会が開かれているので、その時点を具体的な出発点としても、『通史一、二』の刊行(一九九五年十月)までに満十年八ヶ月を経ているわけである。『部局史』、『写真集』と今回の『通史』で、名古屋大学五十年史の編纂事業は一応の完結をみた。

私は初代編集委員長・編集室長として、編纂の基礎固め、軌道の設定を手がけ、『部局史』の刊行までの仕事に関わった。昭和六十三(一九八八)年十月に偶々学生部長に選出され、医学部の加藤延夫教授(現総長)に次の編集委員長をバトン・タッチし、私は編纂事業の中心から降りることになる。

私を中心となって編纂の衝に当たっていたのは、最初の四年間であって、私を支えてくれた助手は初代の井上知則君、二代目の勝山吉章君であり、この両君とはたっぷり苦勞を共にした。

『通史二』の末尾の方で、名古屋大学五十年史編纂の経緯については淡々と叙述してあるが、とくに編纂発足の前後にはこの叙述の蔭にさまざまな印象深い体験が織りなされている。そのうちの二、三を、以下にエピソード風に綴ってみることにする。

これは編纂前史になるが、昭和五十八年四月から私は教育学部長に就任していた。当時、学部内の有志（当時の評議員鈴木英一教授や篠田弘教授たち）で大学史編纂の重要性について話し合っていた。その結果、私と鈴木教授とで、当時の飯島宗一学長を学長室に訪ね、大学史編纂への着手を進言し、『名古屋大学五十年史企画試案』を示した。飯島学長は快く私たちの提言を受けとめ、「学部長会に計画案を提言するよう」指示してくださった。その結果、昭和五十八年九月六日の学部長会に、この提案が出され、私はその内容を説明したわけである。その後、この件は各学部ではかられ、全学の合意として、また創立五十周年記念事業の一環として具体的着手・発足に向かうようになっていく。かつて、昭和五十年から翌年にかけて開かれていた「名古屋大学歴史編纂準備委員会」にも横越英一氏（法）、網野善彦氏（文）、塩沢君夫氏（経）、平松義郎氏（法）（横越・平松両氏は故人）などと共に加わっていた私としては、具体的発足への飯島学長の力強いバック・アップはとりわけ嬉しく、感激的な経験であった。その後のことであるが（早川幸男学長になってから）部局史の題字揮毫を依頼に、井上助手とともに飯島先生の自宅を訪問したことがあった。学長職任期満了後、県芸術文化センター総長に就任されていた先生から、その後の編集の推移などを尋ねられたように記憶する。飯島、早川（故人）そして現加藤総長にいたる大学のトップリーダー三人が、それぞれに大学史編纂に対して深い理解と暖かい支援を惜しまなかったことは、編纂事業に関わった者として

最大の励ましになった。とくに加藤総長は二代目の編集委員長の経験を踏まえて、編纂事業終了後の事後処理やアーカイヴズ（資料室）設立への理解と力強い支持を与えて下さっているようで、本事業の提案者の一人として心より感謝している。

話題を変える。編集委員会が発足し、編集室を本部内に設けることになった。助手は全学教官欠員流用によってポストをみだし、形式的な所属は委員長の所属する学部、つまり教育学部ということになった。歴代の助手は皆そういう処遇であった筈である。本部旧館正面入口を入れて直ぐ右の階段を昇り右へ少し行った部屋が編集室ということになった。編集室に新しい看板を掲げるということで、当時の庶務課長補佐の河村富司さんが新しい生木をかっついで私の研究室に訪ねてきた。そこで看板の字を書かねばならぬという破目に陥ったわけである。早速墨をすつて気分統一し、「墨痕鮮やかに」（？）筆をおろしたつもりが、生木に墨が染み込み何とも無惨な筆跡になってしまった。誰だか忘れて了ったが、教育学部事務室にいた知患者のアドヴァイスで生木を裏返し、その表面を白墨で塗って筆をおろしたところ全く染みなかった。それが十年間にわたって編集室のドア横に架けられていた看板である。この看板をはずして裏を見ると、そこには染みだらけの無惨な文字が其のまま残されている筈である。

編纂発足時には、五十周年記念事業の募金活動も未だ緒にもついていず、編集を進めていくための財政的基盤は零であった。募金が少しでも集まるまで、何とかつないでいく必要に迫られた。当時の事務局長、庶務部長、庶務課長をはじめ、庶務課のスタッフ、またとりわけ経理部長、主計課長、経理課長など経理部のスタッフにはいろいろ御世話になった。経理部長だった伊田和身氏、島田直樹氏にはとりわけ御好意を示していただいた。要するに、一部の学部が保有する委任経理金を部長裁量で一時的に編集費に廻してもらったわけである。そのような弾力的措置によって、編集室の仕事は順調にスタートしていったわけである。五十周年事業の募金が順調に集まるようになっ

てからは、この心配も無用になったが、当初は頭を悩ましたものである。のち学生部長になってから、出張で琉球大学に赴いた折、琉球事務局長になっていた島田さんと一タカラオケで歓を尽くし、併せて往事の苦労談を酒の肴にしたのであった。そのときに行った店の名が「いちやりばちよーでい」（沖縄の言葉で、「行き逢えば兄弟」という意味）であったことを覚えている。大学史編纂や学生部長の仕事をしたおかげで、私は事務局の方々の仕事の実情やその苦労をいささかなりとも知ることができ、又知友もできた。編纂については事務局（庶務課）の地道な協力があつた、それは教官と事務官の共同作業であつたともいえるであろう。その意味で前述の三代の学長・総長のみならず、編集室事務助手の人々、庶務課の担当者の人々と若い助手の人たちが心を通わせあつて仕事をしてきたこと、こういう眼に見えない仕事のプロセスの積み重ねが、『名古屋大学五十年史』部局史、通史の全四巻と写真集を産み出す大きな力になっていることを夢忘れることがあつてはなるまい。最後に、共に編集の仕事に携わつた教官・事務官の各位に、あらためて感謝の意を表したく思う。

編集過程での苦労談は他にも多くあるが、紙幅もふえて了つたので、この辺りでペンを擱くことにする。

一九九六・一・二〇

（名古屋大学名誉教授）